

① テーマ 皆が一人の為にできる障がい者就労支援の在り方について

② 発表者 株式会社創心會 創心会訪問看護ステーション福山 石井 裕子

③ 事例概要

氏名 Y.D、20歳代でくも膜下出血発症、後遺症として左側に麻痺を呈した現在60歳の女性である。当初、拒食による体重・体力低下あり、独居でADL・家事動作は自立、屋内にて3度の転倒経験があった。

④ 事例の発生状況と経過

リハビリを開始し、福山センターに入社した時期（平成27年3月～6月）

歩行能力が向上し、3月以降、転倒はなかった。5月に就労への意思があり、当社で雇用が可能か上長（以下雇用者）と確認し、6月から障がい者雇用での入社が決まった。

仕事が始まり、現実と理想とのギャップを乗り越える時期（平成27年6月～8月）

仕事にも慣れ、週2回の習字教室という役割が与えられるようになった。

新たに自分の可能性を見つめ、ヘルパー2級講座に挑んだ時期（8月～12月）

9月から受講が始まった。12月にヘルパー2級を取得した。

⑤ 事例の目標設定・対応方法について

訪問看護からのリハビリを開始し、就労支援に向けた身体的・精神的アプローチを実施。就労から3カ月間COPM実施。さらに通所介護施設就労後、作業療法士と雇用者、ヘルパー養成研修事業者との報連相を主としたチームサポート支援を行った。Y.Dにとって人生の中での生きがいと役割の獲得に向けて、就労の継続を目標とした。

⑥ 対応結果

Y.Dはリハビリを始めた当初と比べ活動と社会参加という点で飛躍的に改善が見られた。別紙1からCOPMではコミュニケーションの問題が見られたが3カ月後には改善が見られた。その後、仕事という役割を与えられたことにより、心身機能に関しては生活リズムが改善され健康管理が行えるようになった。症例はヘルパー講座受講といった新たな挑戦をしつつ与えられた役割や仕事を継続して取り組むことができた。

⑦ 考察

今回、継続した雇用を実践するにあたり、作業療法士を中心としたサポートチームの連携を取り上げた。Y.Dの就労においての能力を活かすことで、環境に適応できるような対応策を共有することが大切であると実感した。COPMでは、作業項目で上がった「コミュニケーション」の遂行度・満足度が上がっている点からも職場内でのコミュニケーションが改善されていることが分かった。その後、職場での人間関係が構築され、Y.Dの存在役割・行動役割が確立し、新たな職場での役割やヘルパー2級講座への参加に繋がった。以上のようなY.Dの心理状況や更なる可能性の気づきをサポートチームで共有し、Y.Dの可能性を最大限引き出すことを行った。サポートチームを形成することこそ、今後の社会参加を目標とし、就労を支援する支援者側の役割ではないかと考えられた。

以上

別紙1

就労後の仕事が落ち着くまでの COPM の経過及び結果

月日	項目	重要度 (/10 点)	遂行度 (/10 点)	満足度 (/10 点)
6/4	・高い所にある物を取りたい	3 点	2 点	1 点
	・掃除 (仕事)	5 点	10 点	10 点
	・洗濯 (仕事)	5 点	10 点	10 点
	・パソコン (仕事)	4 点	4 点	4 点
7/3	・高い所にある物を取りたい	8 点	4 点	3 点
	・コミュニケーション(仕事)	9 点	6 点	3 点
8/14	・高い所にある物を取りたい	5 点	7 点	8 点
	・コミュニケーション(仕事)	9 点	8 点	7 点

*7月以降に関して、掃除・洗濯項目は7月と8月とも6月と同一の点を出している。パソコンは7月以降にパソコン教室に通うことが決まった為、7月以降は作業項目として挙げてない。また、9月以降からは重要とされる作業はあるが、遂行度・満足度ともに高点数だった為、評価を中止した。